



TITLE:

十六世紀の原價計算

AUTHOR(S):

岡本, 愛次

CITATION:

岡本, 愛次. 十六世紀の原價計算. 經濟論叢 1939, 49(4): 658-662

ISSUE DATE:

1939-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131302>

RIGHT:

經濟學叢論 每月一日發行
第四十卷第四號 昭和十四年十月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第四號

昭和十四年十月

論叢

利率決定者としての銀行……………文學博士 高田保馬
調査論……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

稅制改革論……………經濟學博士 汐見三郎
戰時統制經濟下の産業組合……………經濟學博士 八木芳之助

研究

前漢書貨殖傳に見はれたる經濟思想……………經濟學士 穗積文雄
聖トマスの共同體思想……………經濟學士 澤崎堅造
十九世紀末葉の人口論者ハンセンに就いて……………經濟學士 青盛和雄

說苑

貨幣數量説の諸形態とその吟味……………經濟學士 青山秀夫
十六世紀の原價計算……………經濟學士 岡本愛次

附錄

彙報

外國雜誌論題

(禁轉載)

十六世紀の原價計算¹⁾

岡本愛次

一

原價計算は十九世紀に源を發するとは通説であるが、原價會計の或種の要素ははるかに古い。現存する中世營業記録は、工業會計が早くも十四世紀の初め使用された多くの例を示す。そして總てこれらの諸例は疑なく原價發見の端緒的形式は普通産業革命の數世紀以前、既に資本主義的秩序の下に來た鑛山、織物の如き工業に於て採用されたことを示す。

徹底的に組織的な簿記法は先づイタリアに發展し、そこより北部歐洲、特に低地方に擴つて行つた。この低地方へのイタリアの影響の興味ある例は十六世紀の有名なアントワープの印刷者にして出版者 Christopher Plantin^(註1)に屬する一揃の勘定帳簿に依り與えられる。

この一揃は複式に且又イタリア語にて記帳された一冊の元帳と一冊の仕譯帳より成る。詳細に吟味すると、

これらの帳簿はベニス式に記帳されてをること、並にこれは工業會計の例であり、且織物、鑛山よりもむしろ印刷並に出版業に適用されてをることが注目される。吾々はこれらの帳簿に於て、原價發見の眞の試みがなされてをることを研究して見たい。

(註1) C. Plantin はフランス人、一五五五年アントワープに印刷業を開業。一五六三—六七年四人の學藝愛護者と組合を形成。一五八九年死亡。彼は出版者、印刷者、書籍商で、自己の勘定で彼が編輯した書物を印刷し、卸小賣した。一世紀の四半期間に全歐に於ける指導的印刷者となつたが、その繁榮の頂上にある時は一〇〇人以上の人が使用され、二二の印刷機が活動して居た。

二

印刷所の複式簿記法に依れる、イタリア語の勘定帳簿は一五六三年成立の組合に屬し、一五六三—六七年にわたるが、それ以前並に組合解散後は單式簿記法を使用して居た。こゝに吟味せんとするはそのイタリア語の勘定帳簿である。

組合形成の條項は現存してをるが、それに依ると資

- 1) Florence Edler, Cost accounting in the sixteenth century, in The Accounting Review, September 1937.
- 2) Del Bene Company, Francesco Datini, Medici, Ragusa の造幣局長の諸帳簿、又16世紀にはドイツの鑛山業のそれである。
- 3) Charles & Cornelius van Bomberghen., Jean van Gorp 別名 Goropius Becanus,

本は各々三〇〇リール・ドゥ・グロス^(註二)の六分前に分

割、その中CとPが⁴⁾一緒に三分前をとり他の三人が各々一分前宛とつた。そして利潤は比例的に配分される。

又Cが組合帳簿記帳の責任を負ひ且十月一日、年に一回他の組合員に會計報告なすべく規定してをる。

Cに依り記帳された帳簿は先述のイタリア語のベニ式複式簿記法に依れる、仕譯帳と元帳であつた。これらの主要勘定帳簿以外に猶多くの組合に關する帳簿がある。それらは當座帳乃至補助簿として使用され、先のイタリア語の帳簿が基づく材料を呈供するものである。P自身に依り書かれフランス語を使用した。

Pはそれらの帳簿を皆單式簿記法に依り記帳した。

即ち(1)ある種の仕譯帳——業務仕譯帳 (*Journal des affaires*) と呼ばれ、その中に總ての取引、即ち什器、用紙の購買、販賣、收入支出が記される。(2)ある種の元帳——業務元帳 (*Grand livre des affaires*) と呼ばれ、同一の取引が多少集中された形式で再記されてをる。この二帳簿はじ及び彼の簿記方に非常に利用された。その他の帳簿

として貸銀帳簿 (*livre des ouvriers*——植字工、印刷工、その他

に支拂はれた貸銀の詳細な記録) 書籍商簿 (*livre des libraires*

——Pの出版物を購買した書籍販賣商の人名勘定を包含する) 小

賣販賣簿 (*livre des ventes à la boutique*——P自身の書籍商店に

於ける現金販賣を記帳せるもの) 他の一はPの仕譯帳(組合

開始時に於ける什器の財産目錄が記録され、又色々の勘定を包

含する) 紛失した二個の帳簿は什器簿 (*livre des ustensiles*)

——今日設備元帳と稱するもの(製本師備忘録 (*memorial des reliures*——製本師との勘定を包含する) である。

イタリア語元帳に於ては、各組合員の組合に對する

出資は *conto di capitale* (資本金勘定) に依り表現されて

をる。貨幣支拂の出資の反對記帳は現金勘定に示され

るが、この勘定は少しばかりの色々の他の項目を包含

し、先に締切られ、一五六五年作製の殘高表には現れ

て來ない。

Pのなした總ての現金收入支出は *conto corrente* (交

互計算) と稱せられるPの名前の第二の勘定に示され、

彼の資本金勘定とは區別してをかれる。この *conto*

Jacopo de Schotti.

4) Cornelius van Bomberghen の略、以下同じ。

5) Christopher Plantin の略、以下同じ。

corrente は事實上現金勘定の地位をとり、P が責任を負へる總ての現金に關する取引を記帳する。

その他の元帳勘定の名稱と機能とは明らかにその組合の工業的性格を示すものである。印刷機、活字、造作と稱せられる諸勘定は近代工業會計の設備諸勘定に相應じ、使用された用紙のための用紙勘定は原料勘定に應ずる。製造費用は *spese di mercanzie* (商品諸費用) と稱せられる勘定に示され、賃銀、その他の費用が借方附られてゐる。

P が印刷を引受けた各書物に對し特殊の勘定が元帳に開かれる。“*Virgil in 16^o*” “*Horace in 16^o*” の如きである。これらの諸勘定は使用された用紙、賃銀、印刷諸費用に對して借方附らる。書籍が印刷機を離れると、その特殊の勘定は抹殺せられ、*libri in monte* (在庫書籍) と稱せられる勘定が借方附らる。かくて印刷される各書物に開かれた諸勘定は近代工業會計の半製品勘定と同一であり、在庫書籍勘定は完成品勘定に當る。

只今總括して來た手續は、原價會計が十六世紀に於

ても全然知られて居なかつたことを示すため更に詳しく説明するであらう。吾々は次に設備(印刷機)勘定、原料勘定 (*Papier carré fin de Troyes*)、製造費用勘定 (*spese di mercanzie*)、半製品勘定 (*Virgil in 16^o*) 並に在庫書籍勘定、それから *telioni et crellioni* と稱せられる勘定につき多少の詳細をあたへることにする。

組合成立後、P の直接の仕事は印刷機及びその他の材料を据附けるにあつたが、最初の三ヶ月間に三個の印刷機、數ヶ月後更に一個加へられた。これらの購買に關する詳細はP に依り記帳された三帳簿——什器簿、P の仕譯帳、業務仕譯帳に同様詳細に與へられてゐる。かくて吾々は各印刷機の色々の部分が如何程費用を要したか正確に知り得るのである。

イタリア語仕譯帳は全取引を一層凝縮した形式で與へる。こゝに於ては印刷機勘定は借方附られ、P の *conto corrente* は貸方附られる。イタリア語元帳に於て、印刷機勘定は仕譯記入より期待し得べき形式にある。

用紙勘定の例として、papier carré fin de Troyes⁶⁾ 勘定を選ぶだ。これが“Virgil in 16”に使用された用紙であり、その一一〇レンがフランスより購入された。これらは業務仕譯帳に詳細に、業務元帳に多少簡略な形式で與へられてをる。

イタリア語の仕譯帳に於ては、papier carré de Troyes 勘定は借方附け、P の conto corrente は貸方附られる。この記入は元帳に轉記されるのであるが、この元帳勘定には金額欄以外の附加欄が用紙の數量のため借方、貸方の兩側に準備せられてをる。

“Virgil in 16”の印刷のため購入された一一〇レンの中一一〇一レンが使用されたが、その原價と二一s 一七d 八が“Virgil”勘定に借方附られ、用紙勘定に貸方附られる。

spese di mercanzie 即ち製造費用勘定は、業務仕譯帳に依れば、P に依り支拂はれた總ての雜費、並に賃銀に對して借方附られる。P の最近の記帳を受取る毎に、C はその當時の色々な項目と一緒に集め、單一記

入となし、P の conto corrente に貸方附け、製造費用勘定に借方附る。そしてこの製造費用勘定の借方附は各特殊の版の勘定に振替へられる。“Virgil”の場合は P はモ八s 一九d 八を植字並に印刷の賃銀のため支拂つたが、この額は製造費用勘定より“Virgil”勘定に振替へられたものである。

吾々が見て來た如く、“Virgil”勘定は使用された用紙のモ二一s 一七d 八並に賃銀のモ八s 一九d 八が借方附られる。これらの借方に用紙の價格の推定的誤謬のためモ二s 二d 一が加へられる。この全額モ三三s 一九d 五が出版原價を示すものと考へられるのである。この額の中にはインキ、糊、絲の如き補充物の消費のため、並に割掛費、減價償却費のため何等斟酌がなされてゐぬことが注意さるべきである。併し先の總額は主要直接費を包含するものであり、補充物は用紙、賃銀に比し瑣細の費用である。減價償却は、印刷工業は未だ手工業的段階にあり、使用された設備は餘り高價ならず、それが豫見し得る期間内に陳腐又は磨損す

6) トロワの上等印刷紙とも云ふべきもの。Troyes はセーヌ河上流の舊都。papier carré は用紙の一種類にして、印刷、筆記用のものなり。

る危険がなかつたのである。⁷⁾

“Virgil” 勘定は在庫書籍勘定への借方附により抹殺される。この倉庫勘定は書籍が印刷機を離れ在庫される時原價で借方附られ、書籍が商人又は公衆に現金で賣却されて初めて *carta et libris venditis* (賣却された用紙並に書籍) と稱せられる販賣勘定に貸方附られる。在庫書籍勘定に於ては附加欄が書籍の數量のため借方、貸方の兩側に準備されてをる。

書籍の掛賣は書籍商簿なる一種の補助元帳に記されたが、こゝには勘定が各商人毎に開かれて居た。イタリア語元帳には併し何等の個々の人名勘定が存在せず、*debiti et creditori in monte* (債務債權者、集合勘定) と稱せられる一般勘定が使用されてをる。

最後にイタリア語元帳に存在する唯一の殘高表に一言するに、それは組合成立後一年半の一五六五年四月二六日の日附のものである。この殘高表は試算表にすぎず在庫書籍勘定並に販賣勘定に關し、利潤確定のため原價に依る棚卸にて修正する所がなかつた。損益勘

定は貸金に對する利子の $\frac{1}{4}$ を以て借方側にあらはれてをるに過ぎぬ。この試算表の作製後、そこに現れる色々の價額を繰越し、新勘定が開始された。

(註二) *livre de gros*. フランダースポンド即ちフランダーズに於ける計算貨幣にして、P が彼の帳簿に於て使用せる、フロリンカロルの六倍の價値あり。イタリア語元帳並に仕譯帳はこれを使用してをる。

三

この簡單な分析で吾々は P の組合の簿記法の産業的性格に關する諸勘定のみを研究して來た。そしてこれらの諸勘定の中でも最も單純な例 *Virgil* を選擇したが、彫刻、木版のための諸項目、校正者のための項目等が高價な書籍の場合附加される以外、組合の存続中印刷された他の書物に對し開かれた諸勘定も本質的に同一である。

先述の如く吾々はきはめて粗朴な、原價計算の端緒的形式と思惟されるものを見て來たが、パチオロ、その他の簿記書の著者も之に關し何等ふるゝ所がなかつたのである。

7) Edler, Ibid p. 231

8) 1 livre de gros = 20 shellings (escalins) 1 shelling = 12 deniers de gros.